**学生調査から大学、学生のあり方を考える**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　武内清

今「学生の為の大学」や「学修者本位の教育への転換」（文部科学省）と言われ、学生に大学教育に対する評価や大学生活に関して聞き、その結果を大学改革（改善）に反映してこうという傾向が生じている。現在多くの学生調査が行われている。その主な調査の結果から、これからの大学、学生支援のあり方を考えてみたい。

**１　文部科学省の「学生調査」**

　　中央教育審議会の答申等を踏まえ、令和７年度より本格実施される「全国学生調査」の試行調査の3回目のデータ（2022年実施）が一部公開されている。４点に興味をひかれた。

　第１に、第２回（2021年）と第３回を比較すると、学生の解答にコメントが付されて返却される、授業での討論等、大学教員の教育指導が学生に寄り添いきめ細かくなっていることがわかる。

第２に、大学教育や授業のあり方には、大学差（国公私・規模）があること。全体に私学の小規模校できめ細かい教育指導が行われ、国立の大規模校では、卒論や卒業研究が行われているが、それ以外の教育指導が手薄になっている。4年制大学に比較して、短期大学の学生に対する教育指導はきめ細かく、学生の満足度も高い。（しかしその短大が、今進学希望者が少なく募集停止する短大が増えている）。

第３に、学生たちは３年までで大方の授業は受講し終わり、４年になると授業受講数が少なく、大学外の学習時間も少ない。就職活動の影響である。

第４に、部・サークル活動への参加は、大規模な国立大学で多く、小規模な私立大学で少ない。アルバイトは、大学差がなく一般化している。

この文科省調査では、アメリカの大学教育がモデルになり、学生が大学の授業で熱心に勉強することを重視する観点が感じられる。

**２　全国大学生活協同組合連合会の調査**

　全国大学生協は、1963年より毎年秋に大規模な大学生調査を実施し、そのデータを蓄積してきている。主に、大学生の消費生活に関する調査項目が多いが、長年の経年比較ができる。2024年10月実施の第60回調査では、「大学生活が充実している」が93.0％（1990年72.2％）、「大学が好き」が93.7％（1990年80.6％）と高くなっている。

　大学生活の重点を見ると、1980年では「よき友・人間関係」(34.7%)が一番多く、「勉強」（19.5%）は少なかったが、2024年では、「勉強」（33.5%）が1位になり、以下順に,「サークル・部活動」(17.6%),「よき友・人間関係」(14.3%),「ほどほど」(13.1%),「趣味」(9.4%),「アルバイト」(4.3%),「何となく」(4.0%)と続いている。

　サークル活動への参加率は、1990年（64.6%）→2024年（63.8%）と変化はない。

　読書に関しては、1日の平均読書時間は2004年(29.8分) → 2024年(30.2分)とこの20年間変化はないが、「全く読書をしない」人が増加していて（45.6％）、読書する人としない人の分化が進んでいる。1週間の勉強時間は、大学内414分、大学外207分とこの20年間で倍増している。登校日ゼロの学生は減少している。大学の授業は対面授業と非対面授業が混在のハイブリッド化が進んでいる。生成系AIの利用経験ある学生も増加して7割に達している。

**３　ベネッセ「第4回大学生の学習・生活実態調査」**

　第4回が、2021年12月にWEBで、大学1～4年4124名の回答得て考察されている。

大学生活の中で「力を入れた」のベスト3は、「大学の授業」76.9％、「アルバイト」65.3%、「大学以外の自主的な学習」49.0%である。これらは最近皆増加している。「サークル・部活動」「読書」は減少している。2021年の大学の授業の形態を13年前と比較してみると、「ディスカッション」「グループワーク」「プレゼンテーション」「教員からコメントの返却」が増加している。

　「大学での学習の方法は、大学の授業で指導を受ける方がよい」(2008年39.3%→2021年57.1%)など、学生の自主的な選択より、大学教員の指導を期待する傾向が増加している。それだけ学生の「生徒化」がすすみ、学生の大学教育への期待が高校以下の教育と変わらないものになっている。

**４　片桐新自『昭和・平成・令和の大学生─ 大学生調査35年から見る価値観の変化 ─』**（関西大学出版部、2024）

　第1回の調査は1987年に実施され、第8回の2022年実施まで、5年ごと35年間の関西地区の大学生のデータが分析されている。授業に「よく出席する」は、1992年36.1％、その後5年度ごとに上昇し、2022年には77.0%と多くなっている。その理由として、①大学の出席重視、②学生の生徒化、③就職活動以前の単位の取得が指摘されている。

「大学の入学理由」の変化として増えたのは、「大卒の肩書が欲しかったから」 （32.5%→57.9％）と 「就職を有利にするため」（36.6％→ 64.3％）という就職準備の理由である。35年間の大学生の変化を『「レジャーランド」から「就職予備校へ」』と解釈している。

現代（2022年）の青年（大学生）の特質を、筆者は「新・個同保楽主義」としてまとめている。つまり、それは新しい個人主義、同調性、保守性、楽をしたいという特質で、その詳細をその時代的な背景とともに具体的に記述している。

**５　大量の調査データで共通にみられる現代大学生の特質**

　これらの最近の大規模な学生調査のデータには共通性があり、現代の学生の特質が伺える。

第1に　大学生が勉強中心の生活を送るようになっている。生活の重点の第1は「勉強」であり、大学内での勉強時間も大学外の勉強時間も増加している。大学改革で教員が学生に対する教育指導をきめ細かく行うようになったということがその背景にある。授業も、学生同士の討論や発表も取り入れたアクティブラーニングが取り入れられている。学生は、このような教員の指導を肯定的に評価している。

　第２に、サークル・部活動への参加に大きな変化はないが、小規模の私学で減少している。読書する人と読書しない人の分化が進んでいる。学生アルバイトは常態化して、学生生活の一部になっている。

第3に、読書や卒論や卒業研究に打ち込む学生は一部いるが、就職の為の大学という意識は強く、早い時期からその準備をしている。必修の単位は早く履修し、3年生の後半から就職活動やその準備に専念する学生が多い。

　**６　これからの大学教育のあり方**

　以上の最近の大学生の特質を踏まえて、これからの大学教育のあり方に関して、筆者の見解をまとめておこう。

　第1に、アメリカの大学の学生を勉強させる仕組み（シラバス、厳しい成績評価等）をモデルにして、学生を勉学に向かわせようとしてきたこの間の日本の大学改革は成功して、大学生が「勉強」を生活の第1に置く傾向が定着している。

　第2に、学生の主体性や批判的な能力が育っているかは疑問である。大学教員の指導に期待する「生徒化」傾向は増しており、批判精神や自由に新しいことを探求する意欲が育っているようには思えない。

　第3に、以前日本の大学はレジャーランドと言われ、学生は、授業には出ず、サークル活動や遊びに明け暮れ、大学は若いエネルギーを発散する場になっていた（「時間の浪費の制度化」副田義也）。一方で、読書をして、自由な活動や冒険をして、社会で活躍する資質能力を培っていた。そのような学生の自由を許容する伝統は今の大学にも残っている。大学は、知識を媒介にしたコミュニティーであり、授業だけでなく、サークル・部活動、友人関係、行事、ボランティア活動、アルバイト、メディア接触も含めて、自由に選択して自己成長をとげる場である。勉強だけでなく様々な活動をする学生の大学生活満足度は高い。学生が多様に活動のできる機会や場を大学は設けたい（武内清『学生文化・生徒文化の社会学』ハーベスト社、2014）。

　第４に、大学生の「資質・能力」は高校時代までに形成されたものがそのまま継続されることが、大規模な時系列調査で明らかにされている（溝上慎一編『高校・大学・社会　学びと成長のリアル』学事出版、2023年）。大学に入る為の受験勉強と大学での学びとの関係はどうであろうか。入試の画一的な答は生徒の旺盛な探求心を摘んでしまうとも考えられる。一方受験は多くの情報や選択肢の中から、限られた時間の中で的確な答えを見出すもので、その能力は汎用性が高く、企業が偏差値の高い大学生を好んで採用するのはその証である。大学時代の学びは、社会でのキャリヤに役立つのであろうか。「卒業時の知識能力」は「現在の知識能力」を経由して「所得」に影響を与えている（矢野真和『今に生きる学生時代の学びとは』玉川大学出版部2023）。大学教育を、高校までの教育との接続と、将来のキャリヤとの接続で考えることが大切である。

第５に、これらの大規模な学生調査で、日本全体の学生の特質の傾向や変化の分析と同時に、大学類型（国公私、規模、大都市と地方、偏差値等）や、個々の大学ごと、また個人の資質能力別のデータ分析も望まれる。これらの各大学の学生調査の結果は、各大学にも返却され、それを教育改善に役立てることが期待されている。各調査の公開できるデータは公開し、大学改革に役立てたい。

一般に、伝統のある高偏差値の大学では、そのレッテルがチャーター効果を生み出し、汎用性のある教養科目が学生にも人気がある。他方新興の選抜性の低い大学では専門に特化した科目を学び、資格を修得してキャリヤの生かそうとする学生が多い。新興大学には、基礎学力の低い学生も多く、きめ細い教育指導が必要であるが、同時に多様な資質能力をもった学生が多くいて、教育次第でその伸びは大きい。

生成AIは進化しているので、これからの大学教育への影響は大きいであろう（『現代の教育課題を読み解く』中央教育研究所、研究報告No103,2024）。また、新型コロナ期に経験した遠隔教育が拡大すれば、大学間の壁を越えて、また国の壁も超えて、大学の授業が共有され、大学間の交流もすすみであろう。

（上智大学・敬愛大学名誉教授）